

■学校経営のポイント

子どもたちの命を守る

喜名 朝博

7月12日に亡くなったタレントの報道を受け、厚生労働省はその日のうちにメディア関係者に対し、子どもや若者、自殺念慮を抱えている人の自殺を誘発する可能性がある報道は控えるよう通知した。自殺報道については、WHOのいわゆる「自殺報道ガイドライン」を踏まえて行われているはずだが、芸能人の自殺はそれだけ、社会や子どもたちへの影響が大きいことを表している。

児童生徒の自殺者・過去最高

昨年度の児童生徒の自殺者数は過去最多の514人となり、文科省は7月10日に「児童生徒の自殺予防に係る取組について」という通知を出した矢先であった。これは、18歳以下の自殺が学校の長期休業明けにかけて増加する傾向があることから、夏休みを前に学校として取り組むべき内容を示したものである。

今般の通知の特徴は、1人1台端末の活用により子どもたちのSOSを早期に把握する手法を詳細に示していることである。また、アンケートフォームを作成するためのマニュアルも添付されており、すでに活用した学校もあるのではないだろうか。

特に注意を払うべき子どもたち

夏季休業中、登校日や部活動等がなければ、子どもたちの姿を確認する術がない。特に注意を払うべきは、不登校状態にある子どもたちやいじめ問題の渦中にある子どもたちである。不登校の子どもたちには、自分の存在意義を確認したいという強い思いがある。夏休み、他の子どもたちが休みを楽しんでいる様子を知るにつけ、自らの存在意義が見えなくなってしまうことがある。

いじめ問題については、解決したという学校の思い込みは危険である。さらに、加害・被害の関係性も意味をたず、当事者の誰もが不安や悲しみを抱え

ていると捉えるべきである。そんな子どもたちが、様々な報道に触れたとき、急速に自分事になっていくことがある。

つながりを絶やさない

そのため、少しでも気になる子どもがいれば学校として共有し、あらゆる機会をとらえてつながりを絶やさない取組が必要となる。その一つの手法として、1人1台端末の活用が有効だ。メールのような文字のやり取りのほか、オンラインで顔を見ることができれば互いに安心できる。

さらに、この手法は担任する全ての子どもたちにも有効だ。何気ない会話から違和感を感じ取ることができれば、次の行動を取ることができる。学校では悩みを見せない子どもが、深い闇を抱えていることもある。家庭が安心できる場所になっていない子どももいる。家庭の問題を担任には伝えたくないと思っている子どももいる。つながりによってそんな子どもたちの心の裏側を理解したい。

援助要求行動を取れない子どもたち

子どもたちの自殺予防に向け「SOSの出し方に関する教育」が行われている。苦しいときやどうしても分からないときに、身の回りの誰かに「助けて」「何とかして」と援助を求められるようにするための教育である。

夏季休業中、子どもたちの顔を思い浮かべながら、この子は援助要請行動がとれているだろうかと考えてほしい。困っているのにそれを言葉にできない子、「分からない」と意思表示できない子、少しでも気になることがあれば、すぐに連絡を取ろう。それが子どもたちの命を守るためであれば、杞憂に終わってもよいではないか。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●子どものSOSに気づけていますか？ 自殺を減らすために、教師が今できること<<好評発売中！>>

【改訂版】**教師にできる自殺予防――子どものSOSを見逃さない**

高橋聡美【著】 A5判／定価 2,090 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> をご利用ください。

